地域の仕事と農業

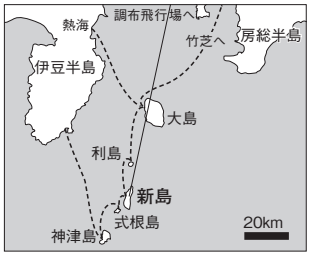
―収入の安定と趣味の事業化を実現

ライター　秋枝ソーデー由美

東京から南へ約一六〇キロメートルの太平洋上に浮かぶ新島（にいじま）は、面積二二・九七平方キロメートルの南北に細長い島で、人口は二一二〇人（令和二年一二月一日現在）。面積、人口ともに伊豆諸島の中では中堅にあたるが、隣の式根島（しきねじま）を含めた新島村の高齢化率は、三九・八パーセントと、諸島内でも特に高齢化が進んでいる。労働人口が限られる一方、島の将来を担う子どもたちの多くは、高校卒業と同時に進学や就職のため島を離れてしまう。島外からの移住者も多くはないことから、島では慢性的な人手不足に悩まされている。

一般的に離島では古くから半農半漁など、自然環境に合わせて仕事を組み合わせる働き方が定着しているところが多い。新島においても、旅行者で賑わう夏と、強い偏西風が吹き荒れ船が頻繁に欠航する冬とでは、人や物の流れがガラリと変わるため、観光シーズン中だけ民宿や飲食店などで働いて、それが終われば別の仕事をするといった季節に合わせた就労のスタイルが定着している。朝は清掃、午後は食料品店といったように、一日で複数の仕事をかけもちする人も珍しくなく、必要時に必要な人が確保できるよう、労働力が流動しやすくなっているのが新島の現状といえるだろう。

そんななか、最近では島に欠かせない仕事に従事しながら、自分の趣味やスキルを活かして起業する人も増えている。今回は三組の農家を通して、新島の複業事情について紹介したい。



新島：伊豆諸島の中心に位置する自然豊かな島。面積22.97km²、周囲41.6km、人口2,120人（令和2年12月1日現在）。島の色が白いことから「あたらじま」と呼ばれ、のちに新島となった。東海岸の羽伏浦は、まっ白な砂浜で、世界有数のサーフポイント。

老人ホームで働く多肉植物生産者

Greenfarm MIYA　公文聡子さん

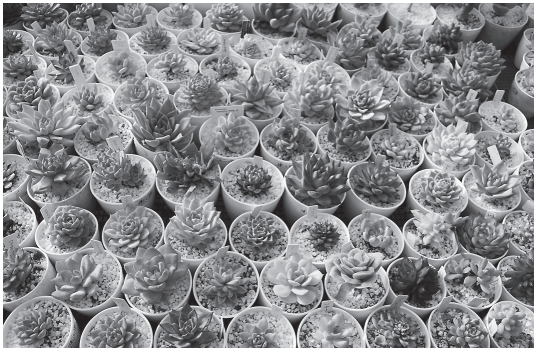
多肉植物栽培で新規就農を

「新島で育てている多肉植物が大人気で、購入が順番待ちになっているらしい」という噂を聞いたのは、一年ほど前のことだ。多肉植物とは、葉や茎が膨らんだ肉厚な観葉植物の総称。体内に水分を多く含んでいるため水やりがほとんどいらず、丸みのある愛らしいフォルムがインテリアに映えることもあって、近年、若い女性を中心にブームとなっている。この多肉植物を島内で生産しているのが公文聡子（くもんさとこ）さんである。新島で生まれ育ち、実家は伝統食くさやの老舗メーカーという根っからの「新島人」の彼女は、高校卒業後しばらくは東京で働いていたが、結婚・出産を機に「子育てするなら島で」と、二八歳の時に家族とともに帰島した。その後、子どもの保育園への入園をきっかけに、島で唯一の特別養護老人ホーム「新島はまゆう会」に就職。現在も栄養士としてフルタイムで働いている。

花粉の採取や整形など、多肉植物の栽培には細かな作業が不可欠と語る公文聡子さん。

公文さんと多肉植物との運命的な出会いは、八年ほど前。趣味でサボテンを育てている叔父から多肉植物をプレゼントされたことだという。「多肉植物は〈葉挿し〉といって、葉から根を出して増やすことができるんです。でも、ちょっとした環境の違いで色や形が変わってしまうし、場合によっては枯れてしまうことも。叔父さんからもらった珍しい多肉を枯らせたくない！　という一心で栽培を始めました」と、彼女は話す。

その後、違う種類同士を交配することでオリジナルの品種を作ることができることを知った公文さんは、「レアな



肉厚な葉が放射線状に開くエケベリア種の栽培を中心に、交配によるオリジナル品種も開発している。

株が欲しくなりましたが、交配の元になる原種はなかなか手に入りません。苦労して手に入れた原種は絶対に大事にしよう」と、株を増やしているうちに、気づいたらこの世界にどっぷりハマっていた。例えば、緑の品種に赤の品種を交配すると、葉の一部だけが赤くなる緑の品種となる。多肉植物は、同属種だけでなく種類の違う異属種とも交配可能なため、無限に新種を生み出せるのも魅力だという。

当初は、自宅でコツコツと株を増やし、インスタグラム（SNS）を介して個人売買する程度だった。「当時、老人ホームは副業禁止でした。いつか引退したら、ちゃんと生産できたらいいなと、漠然と考えていました」と、公文さんは振り返る。しかし、元来の凝り性で研究者肌の彼女は、栽培方法や交配の仕方を独学で研究するうちに、もっと珍しいもの・きれいなものをと、のめり込んでいく。自宅の作業場が多肉植物に埋め尽くされた頃、新島村で意欲ある農家に支援を行なう「認定農業者（認定農家）」という制度があることを知人から聞いたという。「認定農家になると、資材購入費などに村の補助が受けられます。そうすれば、ビニールハウスを作って本格的に多肉植物を栽培できる。ちょうど老人ホームで副業ができるようになったタイミングでもあり、この制度に申請しようと思いました」と話す。

ビニールハウスの全景。自宅の育苗場で大きくした苗をここに移動し、株をさらに育てる。

自分のペースで取り組める二つの仕事

平成三〇年一〇月に認定農家となり、多肉植物栽培用のビニールハウスを一棟設置。現在は自宅の作業場で育苗を行ない、成長したところでビニールハウスに移し替えて栽培している。おもに生産しているのは、葉が放射線状に広がる人気のエケベリア。また、これに別の品種を交配することで、独自の品種の開発・販売も手掛けている。商品は、SNSでも販売しているが、島外の多肉植物専門店や雑貨店などへの卸売が中心。受粉交配から栽培、出荷までの全工程を公文さん一人で行なう上、出荷できるサイズになるまで二～三年を要するため、現在は業者三社に毎月八〇株ずつ、計二四〇株を出荷するのが精一杯だという。それでも一五社ほどの業者が順番待ちをしているというから、すごい人気だ。

「水分が多い多肉植物は凍結に弱いので、温暖な新島の気

候は栽培に向いていると思います。暑すぎるのもダメですが、夏に強めの遮光をして扇風機をかけておけば、特別な装備は必要ありません。生育がゆっくりなので、自分のペースで栽培を調整できるのが多肉植物の良さ。人を雇って生産量を増やすこともできますが、そのぶん管理が行き届かずに評判を落とすリスクもあります。生活がかかっていないから、自分が納得できるまでこだわれるのが兼業の良いところです。老人ホームと多肉植物、まったく違う二つの仕事を持つことでリフレッシュになっている面もあり、良いことしかない気がします」と、公文さん。ビニールハウスで本格栽培を始めて三年、最初に育てた株が出荷の時期を迎えている。二つの職場を行き来しながら「今年は出荷量を増やしたい」と、熱意を燃やしている。

島内で人気の野菜を生産する郵便局員

○み農園　吉見光代さん

自分の楽しみとして野菜栽培をスタート

就農者が少ない新島では、生鮮食品の大半を島外からの仕入れに頼っている。特に日持ちのしない野菜は、手に入れられる種類が限られ、輸送コストが上乗せされるぶん価格も高くなるのが現状だ。前述の通り、村では地産地消や特産品の生産強化を目指して就農支援を行なっているが、令和二年、新たに村の認証農業者（地域の農業を支える小規模農家）として活動を始めたのが、○み農園の吉見一之・光代さんご夫婦である。キャベツや玉ねぎ、大根などの定番野菜はもちろん、スーパーにはあまり出回らない多彩な野菜を農協に出荷、「食卓が賑やかになる」と、住民の間で人気を呼んでいる。

おもに栽培を担当している光代さんは、若郷地区出身で、島内の老人ホームに一六年ほど勤務したのち、新島郵便局に転職。以来、一四年のキャリアを持つベテラン局員さんだ。野菜の生産を始めたのは、三年ほど前からで、「新島ではお香（シキミ）の枝をダントウ（墓地）に飾る風習があり、それぞれの家でお香の木を育てています。義母が畑でその世話をしていましたが、他界したため私が代わって畑へ行くようになりました」と話す。

どうやったら虫に食われないか作戦を立てるのも楽しいと、野菜栽培について話す吉見光代さん。

当時の畑は雑草だらけで、とても野菜栽培に使える状態ではなかったが、お香を取りに行くたびに少しずつキレイにしていった。せっかくなら何か植えてみては、との実母からの勧めもあり、野菜を育て始めたところ、「それまで家庭菜園の経験はありませんでしたが、いざやってみると私って土いじりが好きなんだ」という気づきがあったという。草を取って、土を整え、種を撒き、芽が出て、大きく育つ。野菜を作る工程のすべてが楽しくて、まさに目覚めたという感覚だったと、光代さんは語る。

○み農園では、400㎡ほどの敷地に10種類以上の野菜を栽培している。

郵便局の期間雇用社員として、配達や内務を担当する彼女の勤務形態は、三日または四日出勤して一日休むというもの。勤務時間は、朝八時から午後三時四五分までのため、勤務あがりでも十分に農作業に従事ができる。

「顔を見るような気持ちで、毎日畑に来てしまう」と光代さん。東京で働いている一人娘に野菜を送ると、「弁当にして持って行ったよ」「ピクルスにして食べたよ」と、野菜を通じて会話が増えていき、それが嬉しくてますます野菜作りに没頭するようになったと、笑顔で教えてくれた。

地域住民との会話にもつながる畑の仕事

令和二年春、光代さんは、村の認証農業者になり、農協への出荷をスタートする。常時十種類以上の野菜を育てているが、まだまだ勉強中で教わることが多いという。それでも「早朝に摘んだ野菜を新鮮なうちに出荷する」「ラベルに収穫日を明記する」など、消費者の目線に立った○み農園の野菜は、鮮度も味も良いと評判だ。

チマサンチュやキャベツなどがきれいに実る畑。

「私にとっては、郵便局の仕事が第一。これがベースにあるおかげで、農園をやらせてもらっていると思ってい

ます。郵便の仕事を通して、地域の皆さんとお話できることも嬉しい。畑で野菜を作っている方も多いので、配達先で栽培のコツを教わることがあったり、『（〇み農園の野菜を）いつも食べているよ！』と声をかけていただくなど、畑をやることで以前より島の方々とのコミュニケーションが増えた気もします。玉ねぎや芋が郵便窓口に持ち込まれるのを見て、ああそういう時期なんだなと季節を感じることも多くなった」と、光代さんは話す。

一方、郵便局に勤めていると、島の変化に気づくことも多いという。「一四年前に局員として働き始めた頃は、島で獲れた魚や野菜、特産品などのたくさんの荷物が窓口から発送されていました。しかし、年々そうした荷物が減ってきている」と指摘する。

郵便局との両立を考えると、栽培面積をこれ以上拡大することはなかなか難しいとのことだが、「私が娘に野菜を送るように、島の野菜がもっと島外へ出荷されるようになればいいなと思います。そのためにも、さらに出荷量を増やせるよう頑張りたい」と、光代さんの挑戦は続く。

2019年からあめりか芋の栽培を始め、1,200㎡の畑に4,000本の苗を植えたと話す石野貴子さん。

多数の仕事を掛け持つ野菜栽培・加工会社の経営者

（株）グリーンデメテル　石野貴子さん

島だから可能なマルチワーク

「初めての新島は、三四歳の時です。勤めていた会社を退職したばかりの頃で、友人に誘われるままサーフィン大会を観に来ました。その時、たまたま知り合った女性に『時間があるなら居酒屋でバイトしない？』と誘われて、ちょっとした経験のつもりで働いたんです。その後、東京に戻りましたが、どうしてなのか、また新島に来たくなってしまった。私は、これを島マジックと呼んでいます。翌年の春にまたアルバイトに来て、そうこうするうちに旦那と出会い、島に移住しました」

旅行をきっかけに新島の男性の元に嫁いだという人は少なくなく、石野貴子さんの場合も同様である。ただ、彼女が面白いのは、島での職歴の多彩さだ。居酒屋でのアルバイトに始まり、物流会社、ホテル、漁

協、東京都の大島支庁と、さまざまな職場を経験し、現在は、東京電力の検針員として月に六～八日、島内二地区を検針に回っている。このほか、建設会社で砂利を量るオペレーターや、パトロールスタッフとして山内を巡回するなど、まさに変幻自在なワークスタイルである。「同じ職場にずっといるより、自分にはこの働き方が合っているんです」と本人は笑う。

これらの仕事は、すべて知人からの紹介で得たものだという。あちこちにひっぱりだこなのは、仕事を頼みやすい気さくな人柄や、仕事の正確さ・速さゆえのことであろう。

あめりか芋の収穫風景。写真手前が石野さんご夫婦。種まきや収穫時は知人に手伝ってもらう。

じつは、彼女の本業は、自身が代表を務める「グリーンデメテル」という会社の経営である。デメテルとは、ギリシャ神話に登場する大地と穀物の豊穣を司る女神の名で、若郷地区出身のご主人・正幸さんとともに、特産野菜の生産や漬物・菓子などの食品加工を行なっている。正幸さんは、建設会社で働くかたわら、村の農業委員会の会長も務めるなど、新島の農業に情熱を燃やす人物として島内では知られた存在である。

石野さん夫妻は、休耕地を開墾し、砂地が多く稲作に適さない新島の地質を生かして、特産の島らっきょうとあめりか芋を精力的に栽培している。主力の島らっきょうは、約八〇〇〇平方メートルの畑で、年間生産量は〇・四～〇・五トンだという。

「島での農業はどうしても生産量が少なく、肥料の購入や出荷の際の海上輸送にもお金がかかるので、正直なところ利益はほとんどないのが現状です。けれどコロナ禍を経て、食料の八割を海外に頼っている現実を考えると、新島のような離島は自給率を高め、農産物を増やしていく必要性があると考えるようになりました」と、貴子さんは話す。

野菜栽培における彼女の仕事は、種まきや収穫、出荷作業などのサポートが中心。メインは、野菜を漬物や菓子にする食品加工の分野だ。現在は、特産野菜をボトルに詰めたピクルスを準備中である。ほかの農家とともに島野菜を使った商品の共同開発も進めているという。

貴子さんは、「収入を得るための仕事もしていますが、それがあるから自分の好きなことを〈複業〉にできている。

東京にはたくさんの職種がありますが、ひとつの仕事だけでほとんどの時間が埋まってしまう。私のような働き方は、島だからやりやすいのだと思います。都会のようなストレスもありませんし」と、島の良さについて話す。また、「農業は体力勝負ですが、土仕事は精神的な癒しになる面もあります。若い移住者が新島村の農業に参入してくれたら嬉しい」と、新規就農への期待を語った。

複業で「地域貢献」と「趣味」の両立を

行政や医療・教育機関、インフラや流通、飲食業など、島に存在する仕事の多くは、地域社会に直結している。新島の良いところは、これらの仕事を通して誰かの役に立っているのだと肌で実感できることではないだろうか。また、これらをメインとすることで収入の安定にもつながる。新島の場合、ほとんどの職場が自宅から車で一〇分以内のところにあり、残業も少ない。働きながら、余暇を自分の好きな時間に使えることが島暮らしの醍醐味である。

その一方、「島には職種のバリエーションが少なく、求人はあるが魅力的な仕事がない」という声を耳にすることも多い。実際に「島に戻りたいが、就きたい職がないから帰れない」という島出身の若者たちが存在するなど、雇用のミスマッチも発生している。

これらを鑑みると、本稿で紹介した三人のように地域社会を支えながら、自分の趣味や特技を収入につなげる働き方は、非常にバランスが良く、島での複業のあり方の一つと位置づけられるかもしれない。都会にいなければやりたい仕事ができない、とは限らないことを、彼女たちの事例は示している。

新島では平成三〇年に光回線が開通し、都市部と同様のインターネット環境が整備された。ウェブサイトやＳＮＳを通じた物産の販売もスムーズとなり、コロナ禍を機に島へ来てリモートワークする旅行者も増えつつある。スケジューリングなどの自己管理は不可欠だが、仕事のかけもちが日常的な新島であれば、職場や職種にとらわれない柔軟な働き方も可能なのではないだろうか。■

秋枝ソーデー由美
（あきえだそーでーゆみ）
1967年、山口県生まれ、新島在住。東京の出版社で雑誌編集者として勤務後、フリーランスの編集ライターとして多くの雑誌・書籍・広告・ウェブなどの制作を手がける。2015年、新島へ移住。新島カルチャーマガジン『にいじまぐ』編集長、一般社団法人新島OIGIE（オイギー）理事のほか観光案内所職員、宿のフロント係、スーパーの店員などの仕事を経験。「ソーデー」は屋号。